

施設とか制度とかを主に調査して來た事であるから打つて付けてある。君が美術學校長になれ』

と云ふので、其の年の八月、東京美術學校長になつたのであつた。

この経緯をみると、正木は岡倉寛三と似通つた状況のもとに本校校長となつたことがわかる。両者とも美術局設置という大きな計画を持ち、そのために洋行しながら計画が挫折し、あたかもその代償のようなかたちで本校校長の地位が与えられたのである。なお、正木は校長就任後も後述のように帝国教育会などを通して美術局設置の運動を続けた。

校長就任について正木は菊池大麓、岡田良平らの推輓によるとしているが、次のようなエピソードもあることを紹介しておく。

ところが、久保田氏は校長となる資格がないので、文部省は困り抜いて岡倉先生に相談をもちかけた。即ち後任の校長を、推薦してくれといふのである。岡倉先生は、自分でも十分考慮された揚句奈良へ來て、私に學校のことで困つてゐる。誰か校長の適任者はないか、と言はれるので私は、

「資格のことは何うですか分りませんが、正木氏は奈良にも長くをられて、古美術のことに通じてをられる。今のところ適任者と言へば正木氏位のもので、外にはないと思ひます。」

と、申し上げた。處が先生は、

「や、ついでがあつたので、一寸君に聞いてみたまでのことだ」と、言つて歸られたが、それから間もなく正木氏が校長に就任さ

れた。岡倉先生が、正木直彦氏を美術學校々々に推薦されたなどいふことは、誰れも知らなかつた。文部省と岡倉先生の間だけで分つてゐたのである。無論、當時岡倉先生と正木さんは何らの交際もなかつたのである。

(「岡倉・正木両先生」新納忠之介『古美術』第十二卷第十二号。昭和十七年十二月)

### ③ 校長としての方針

正木は『回顧七十年』の中で校長としてどのような方針をもつて臨んだかを次に述べている。

美術學校に就職して暫くといふものは、學校の空氣とか、從來の校長のやり方、教授間の意響といつたものをよく聽いたり研究して見たりした。ところで、岡倉前校長は天才肌の人であつた。それだけに、物に對して好惡があり、好きなものに對しては大いに力を入れるが、嫌ひなものは見向きもせぬ。だから、好きな人を引立てる爲には、嫌ひな人が犠牲になるといふことが免れなかつた。岡倉君に云はせれば、美術などといふものは多數の凡庸は犠牲にしても、少數の天才が生かされればよい、——と云ふのであつた。然しこれは天才教育家の天才教育法であつて、一般的には融和を缺き、動搖の原因となる。

幸ひ私は、繪畫、彫刻、工藝の何れにも同じ様に興味を持つてゐる。だから、それらを平等に見、扱つて行かう、と考へた。又、教授先生にしても、總てが特技を持った選ばれた人々ばか

りであるのだから、その人の教育法といふものに對しては干渉をせぬことにしよう——と考へたのであつた。

私は美術學校の校長としては、その教授法に對しては、それ／＼の先生方を信頼して、干渉がましい事は全くしなかつた。そしてその力を、先生達の授業の便宜になる参考の圖書とか標本とか美術品とか云ふやうなものゝ蒐集といふことに注ぎ、及ぶ限りそれを整備することに努めたのであつた。

このように、正木は岡倉のような「天才教育家の天才教育法」は採るべきではないとし、万事公平を旨として臨む方針をとつた。

#### ④ 改革着手

正木が校長に就任したときの本校は、正木の言葉を借りれば「紛争が絶えず」「悶着を続けてゐた」(『回顧七十年』) 学校であつた。

そこで、就任早々、彼は先ず懸案の日本画科改革に着手し、人事刷新を図つた。それまで日本画科は教授に川端玉章、荒木寛畝、山名貫義、助教に島田友春、本多天城、天草神来、囑託教員に溝口宗文、雇教員(助教)に高橋烏谷、中村如等がいたが、正木は明治三十四年九月三日に溝口を、同月十二日に高橋、中村を解囑し、同月十三日に島田、天草を休職(ともに明治三十七年九月十二日休職満期退官)とし、次いで同月十七日に本多も休職(明治三十七年九月十五日休職満期退官)とし、同月二十日、日本美術院の下村觀山と寺崎広業を教授として迎え、同年十一月十二日に本校絵画科明治三十年卒

業生で東京府開成尋常中学校助教諭をしていた岡田秋嶺を助教諭に起用。さらに、同月二十六日にはやはり本校絵画科明治二十七年卒業生で高等師範学校助教諭であつた白浜徹を教授に起用し、若手教官中心の指導体制を作つた。

日本美術院の觀山、広業を教授に起用したのは反目しがちであつた院と本校との融和を図るためでもあり、岡倉寛三と協議の上で決定したことである。その点について正木は、

「私が明治三十四年に校長になるに際し、岡倉君と相談して、寺崎廣業君を、下村觀山、小堀輅音〔小堀は明治四十一年起用〕の二君と共に再び教授として招聘したのであつた」(前掲書)と記している。白浜徹の起用は日本画科そのものためというよりも、後述(376頁)の図画師範科設置の準備のためであつたと考えられる。

觀山、広業起用の際における正木、岡倉間の交渉の一端を窺わせる資料に次の二通の書簡がある。

敬啓 益御多祥奉賀候 陳レは小子此程帰京候処大兄ニは学校の事御担任相成候趣 斯道の為メ特ニ欣喜此事ニ候 此上共御尽力相願候 猶又事業上に付御校と美術院(の)と関係の事柄も不謬御座候ニ付此際何れにてか緩々御打合も仕度 何日頃御差支なく候や 御一報被下度候也

先は右得貴意度

(明治三十四年)  
八月廿三日

忽々頓首

正木老兒侍史

寛三

小生ハ暑中ハ向嶋須崎町百五十六番地ニ僑居罷在候 榎本子